

書
銅

日
同

源氏物語玉の小櫛の序

河内成獻納之章

ふよのこゝろにたづねてみよ。世ふ
はる中に。これのひとみよめけ
おのゝこゝろに。先づきく
たのゝよみ。此源氏のお話にあん
あゆむ。ちればそれよのこゝろ

〇序

〇序

502-22

502-22

きりといさぶらふにきり流しゆいしりゆきまおもふては返るる
よりいづれなるおそきとてしるすそのうちかのいづれもた物産ごと
原氏によりきんおれをきりきりきりきりきりきりきりきりきり
さるふれど後のきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
の抱もきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
煙の後のきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
人合せるとせきせききりきりきりきりきりきりきりきりきり
もおろくゆりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
うりてきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
おしてきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

もかきわらひきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
一又まれよまじりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
づまきいつりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
およびものきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
わいじりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
おどのきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
しきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
おおもきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
んじりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
おれきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

むらさきの一巻にゆきふむきのつらみまがらうらむきとるまどいなる
まねまおてふことより業をゆるるといひあつたり業武日記に
在馬つ巻^{公伝}わねうとけりりおこむらむらなやまかろぬらうか
ひあふ保氏ふいほづき人そ終にぬおかのへと業^上まいていそ抱
終つむとまぬらうといつと此日記の文うつはてもゆるとねたまうて
おがゆしこまをハゆうりねはよなるまきハ業といふ名うね業上よりづか
らぬこねをそとてよまてのこま入るぞ無^業まてふりかき
とあわぬらうねをづらふよまへらうまて無^業といはね色^業
上のる^業まてとてうまふらりその名まらむらハ^業かしてふ業
とのる^業たふらるづらしまうらうせ

はくまのゆきよう

此物係いづねよりおて他よりといふことさうおきりかうらうら
上東門院おきりぬ時大赤池より老づらうねおけやとのぞかせ
まつをりお他をてをわうといふ説まどをうたれまうね七海お
くまうらまにまらるがどく又西宮殿うらまをさおき時あそをわり
といつハ時代もまがらわら石山おこりてかろとといひ大般若經の
料紙うかろとねどいつみる安説し行成て信書といふも此人名^ま
まかきたるおおはらうといつねまて又うね石山おらぬまをり
八月十五束の月湖うらうらして心のまをわらまお物係の風
情のんおうかひらまが^川頃慶おるのを次うきねえらるおは慶

へきふあつびといふ人あどどとてつらきとやく傳りぬし日
記ふもとて源氏の相づかりといふきや。

准據

此相法抄より准據といつてつらきとて光原氏といつて人き
りどごと西宮をただ高明公あそくへてあそりといふるがひしれど
おづりあそくくゆるもどとみるあそくくはなそくへてわてさる
あそくつらび大さのほくりもなる中おそくつらきよりあそく
してあそくさそくへまどとてつらきといつて又つらきと一人を一人
あそく傳りぬし源氏君一そつらきの人おもいそくへの人そ
くへあそくつらきもまきまきもろくくふゆとてつらきとつらきとこ

ともつらきてまて定まれることつらきとておろくは准據といつてハ
くど傳りぬしつらきのうちおつらきもあそくも後あそきをあそく
考へあそくつらきもつらきとてあそくもあそくつらきとてあそく
さそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそく
てあそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそく
らあそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそく
のつらきとてあそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそく
あそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそく
び乃とあそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそくつらきもあそく

くさくつらき

あつてけしうハ、勢申も、
をそのまへふゆらりおくるはれ、ものごとおあや、物をま後の抄ど
とふもその考へ、
おり、まへ、そのへ、
動とあるは、
よくかむうへ、

湖月抄の

此物径今の昔、
ふおろくハ湖月抄を、
と、
又

洞のおち、
奥ふ、
く中、
よむべ、
家、
引、
こえ、
例、
おん、

一いつくはるふとひやあてさるるをすし
みるかたへおつまをけきせかたなりしおれをさか
そのよきかたへおつけあきさうふはまをいふ
おたきふふきつらひつひあふふふぞ
人乃みくせはをほりりやうかたは
人のとがど異敷じざえ人のま回じま
こゝとまをいひつりほりりやうに書
おえ乃りりしるるとつらりやうに書
のつらしるるとつらりやうに書
うとまの異敷人乃ま回の読書の
おえ乃りりしるるとつらりやうに書

このかたむき能くやうといはれどか
異國乃書ハじまの人の善悪是非をま
物のさ理をうがらしてさかへげふ
ひて風雅のまぢの詩原のしめひとい
たうかたりてあか情乃おくれぬを
うをへをほくろいふをりてさか
國乃物づるをぬまの情乃やう
書かゝるあふたうの相とらぬ
しくちうしるるやうり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, enclosed in a rectangular border. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page area within the border.



